

巻頭言

年頭にあって

所長 石原 智 男
Tomoo ISHIHARA



昭和56年の新春を迎えるにあたって、一言ご挨拶申し上げます。

私は、昨年11月14日付にて当生産技術研究所の所長に就任いたしました。ここに所長就任のご挨拶をもって新年のご挨拶とさせていただきます。

大学の付属研究所としては日本で最大の規模をもつ当研究所の所長の職責を果たすのは容易なことではありませんが、私としては、全力を尽くしてその任に当たる覚悟であります。しかし、何分にも微力でありますので、皆様方のご鞭撻とご支援とを心からお願い申し上げます。

生産技術研究所は、昭和17年に設立された東京大学の第二工学部が、戦後の学制改革によって、昭和24年に「生産に関する技術的問題の科学的総合研究並びに研究成果の実用化試験を行うこと」を目的とする工学の総合研究所に転換、設立されたものであります。この転換に当たっては、62講座から35部門への規模の大幅な縮小という困難に会いながらも、当時の先輩の方々は工学の総合研究によってわが国の工業技術の水準を高め、世界文化の進展に寄与しようとする大きな任務を自らに課したのであります。戦後の混乱と窮乏の中で、このような責務を全うすることは並大抵なことではありませんでした。初代所長の故瀬藤先生をはじめとして先輩の方々が大変なご努力とご苦勞をもってこの苦難の道を切り開き、今日の生産技術研究所の基礎を築かれると共に、以来、ことに当たっては全所が一致協力するという良き伝統を当研究所に残されました。

この良き伝統のもとに、生研では部門の垣根を越えた研究室間の協調の精神と、共通施設や事務部の積極的な協力の精神とが研究活動および教育活動に強く現れ、これまでに多くの研究成果をあげ、設立当初の目的であるわが国工業技術の水準の向上に大きく寄与し、また工学の面で広く世界の学界に寄与してまいりました。生研のこのような実力と組織力を文部当局も高く評価し、昭和32年度から42年度にわたって8部門が増設され、当初の35部門は現在では43部門となり、さらに加えて昭和48年度に計測技術開発センター、昭和50年度に複合材料技術センター、昭和52年度に多次元画像情報処理センターが設立され、名実共に工学の総合研究所として発展を続けてまいりました。この間、工学の総合的あるいは総合工学的な共同研究が生研の大きな特徴として実施されております。最近の例として、昭和46年度から51年度にかけての臨時事業「都市における災害・公害の防除に関する研究」および「災害・公害からの都市機能の防護とその最適化に関する研究」が、また昭和53年度から55年度にかけての特定研究「省資源のための新しい生産技術の開発に関する研究」があります。これらの共同研究には数多くの研究者が参加し、その目的を果たしてきております。

現在、生研には、より高く、またより多くの成果を求めて、日々研究に精進している数多くの研究者と研究設備の推進に熱心に協力している多数の技術系職員の人々がおります。また、これらの研究が円滑に行われるよう、生研の運営に関して積極的に寄与している事務系職員の人々がおります。このような立派な教職員に恵まれ、国の内外から高い評価を受けている研究所の所長の任に当たることは、私にとりましてまことに名誉なことでもあります。私としましては、歴代所長のとってこられた基本方針を受け継ぎ、生研の発展のために全力を尽くしたいと考えております。

しかし、近年のわが国の財政事情を考えますと、これが大学における今後の研究活動に予算や定員の面で少なからず影響を与えるものと予想されます。特定の研究目的をもつ政府機関の研究所や民間大企業の研究所の大型・最新研究設備に比べて、最近では、一般に大学の研究設備の小型・旧式さが目立ちます。生研もその例外ではなく、研究設備の近代化を今後積極的に進める必要があります。もちろん、研究設備の近代化にも増して重要なことは、個人個人の実力と人の和であることはいまでもありません。これらのことを考え、生研の発展をはかるためには、それぞれの研究分野における個々の研究についてはもちろん、境界領域の課題に対する協力研究や総合的な大型課題に対する共同研究においても、従前にも増して常に学界における先導的立場を保ち続け、生研の存在意義を高めることが必要不可欠であると思います。特に、大型の研究については、生研の特徴を生かして社会の進歩に先ずる課題を選定することが大切であり、所長としては皆様のご協力を得てその実現に努力し、生研の研究設備の近代化をはかりたいと考えております。

最初にも申し上げましたように、私は何分にも微力であります。どうか皆様方の暖かいご鞭撻とご支援とを重ねてお願い申し上げます。

生産技術研究所が本年もますます発展を続けてゆくことを期待いたしますと共に、皆様方のご健康を祈って新年のご挨拶といたします。